

# 群馬県における子育て世帯の生活時間特性に関する研究

前橋工科大学 学生会員 ○矢代 将之  
前橋工科大学 正会員 森田 哲夫

## 1. はじめに

### (1) 研究の背景

現在わが国は少子高齢化という問題を抱えており、政府は異次元の少子化対策を掲げ子育て世帯に向けた支援を計画、また群馬県でも人口を増やすために子育ての不安や負担を解消するための環境が整っていることを10年後に目指す姿とし様々な支援を行っている。しかし国民生活基礎調査では子育て世帯の約6割が「生活が苦しい」と回答している。また国民生活時間調査では近年未就学児が家庭にいる女性の子育て時間と家事時間は増加し仕事の時間は減少していることがわかっている。

### (2) 研究の目的

本研究では群馬県における子育て世帯の個人属性と託児施設の利用有無や家庭内で送迎を担当する人などを子育て特性とし、これが生活時間に及ぼす影響、そして生活時間と居留意向との相互関係を把握することを目的とする。

### (3) 既存研究と本研究の位置づけ

貴志ら<sup>1)</sup>は労働時間と育児や家事、社会活動などの無償労働時間が他の生活時間に及ぼす影響を明らかに、また佐藤ら<sup>2)</sup>は都区部における共働き子育て世帯は駅付近での買物や子供の預け先、通勤のアクセスしやすさを重視した居住地選択をしていると明らかにした。本研究では個人属性も含め労働時間や無償労働時間、他の時間との関係、地方都市である群馬県の子育て世帯の居住選択理由を生活時間との関連性を見出しながら分析する。

## 2. 研究方法

### (1) 研究対象地域

地方都市である群馬県内のなかでも高齢者の割合が県内でも少ない都市を挙げる。中毛地域で人口が多く前橋市・伊勢崎市、東毛地域で人口が多い桐生市・太田市・館林市・みどり市、そして群馬県で人口が一番多い高崎市、以上7市を対象地域とする。

表1 使用データ

調査名	子育て世帯の生活実態調査
調査期間	2023年1月
調査対象者	0～5歳の子どもの保護者(父親, 母親)
調査対象地域(居住地)	前橋市, 高崎市, 桐生市, 伊勢崎市, 太田市, 館林市, みどり市
調査方法	Web調査(モニター調査)
有効回収数	200票(200票に達し次第終了)
調査内容	調査票0:スクリーニング(子どもの年齢, 居住地) 調査票1:世帯・個人属性 調査票2:子の送迎 調査票3:生活・育児時間 調査票4:居留意向

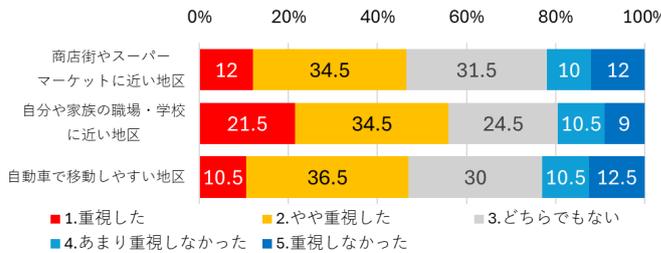


図1 居留意向

### (2) 使用するデータ

使用するデータに関しては表1に示す通り、2023年1月にWebで実施されたアンケート調査もとに分析をする。調査票1が個人属性に、調査票2が子育て特性に、調査票3が生活時間、調査票4が居留意向に該当し、これらの関係を分析する。

### (3) 分析方法

はじめに基礎集計によりアンケートの概要を把握する。そのあとクロス集計により個人属性が生活時間に及ぼす影響、子育て特性が生活時間に及ぼす影響を把握、そして生活時間と居留意向が相互に及ぼす影響を把握する。

## 3. 分析結果

### (1) 基礎集計

居留意向は図1の通り職場・学校に近い地区、自動車移動しやすい地区、商店街やスーパーのような商業施設に近い地区、これら3項目が居住選択の

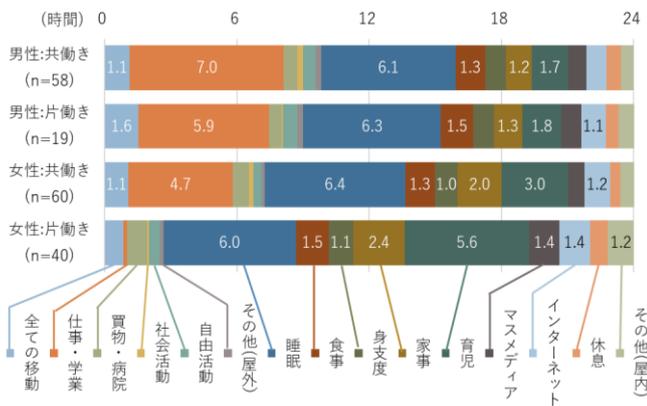


図2 性別労働形態別生活時間

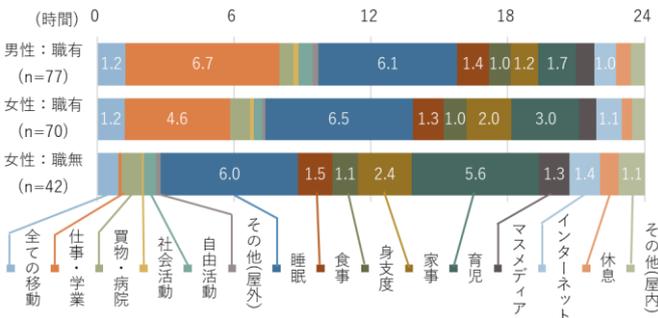


図3 性別職種有無別生活時間

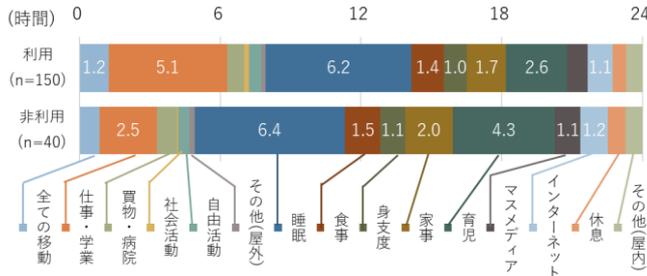


図4 託児施設利用状況別生活時間

際に重要視している項目であることがわかった。勤務地の近さと商店街・スーパーの近さは地方都市の子育て世帯にとっても重要視される項目であり既存研究の都区部とは変わらないことがわかる。次に自動車での移動がしやすい地区に関して、都区部より公共交通普及率が低い群馬県ならではの項目だと考える。

(2) 個人属性別生活時間

性別労働形態別生活時間は図2、性別職種有無別生活時間は図3に示す通り。女性に比べ男性の家事・育児時間が短い傾向があることがわかる。夫婦間での育児の負担が大きいことが考えられる。

(3) 子育て特性別生活時間

保育所や幼稚園、認定こども園などの託児施設の利用状況別に見た生活時間が図4の通り。育児時間の差は約2時間と、仕事・学業の時間が約2.5時間と大幅に変わり託児施設を利用することが生活時間に与える影響が大きいことがわかる。

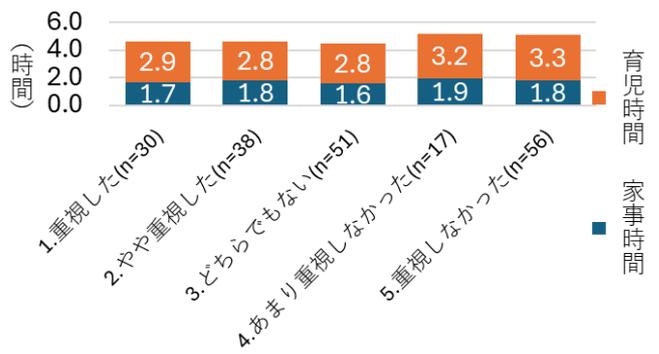


図5 親や親せきの住んでいる地区の意向別家事・育児時間

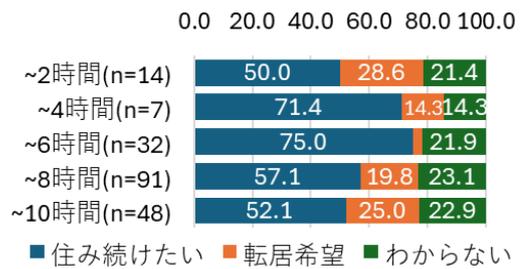


図6 睡眠時間別今後の居住意向

(4) 居住意向別生活時間と生活時間別居住意向

図5の通り親や親戚の近くに住むことを重視している人はしていない人に比べ若干育児時間が短い。このことから育児の分担を夫婦間に限定せず、親や親戚と分担して育児をしていることが考えられる。生活時間別居住意向に関して図6の通り。睡眠時間が短い2時間台が転居の意向が高くその後6時間台まで転居意向は低下するが6時間を越えると転居希望の割合が高くなる結果となった。

4. まとめ

今回アンケート調査から子育て世帯の個人属性と子育て特性が生活時間に及ぼす影響、生活時間と居住意向が相互に及ぼす影響を把握した。個人属性の性別、労働形態が生活時間に及ぼす影響は顕著であり、男性は女性に比べ家事・育児時間が少なく女性の負担が大きいことが考えられる。また子育て特性では施設に預けることで育児時間は大幅に変わってくるということがわかった。

参考文献

- 1) 貴志倫子・上原智子・平田道憲：雇用者夫妻のペイドワーク時間とアンペイドワーク時間-ワーク時間階級別にみた夫妻相互の生活時間-, 日本家政学会誌, Vol. 57, No. 1, pp3-12, 2006.
- 2) 佐藤将・後藤寛：東京大都市圏における共働き子育て世帯の居住形態別にみた送迎および通勤行動, 都市計画論文集, No. 54, pp1570-1575, 2019.